

総合研究所20周年を迎えて 1 : ヴェーバー、トレルチ、ニーバーそしてピューリタニズム (総合研究所News)

著者	聖学院大学 総合研究所
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.18
号	No.2
ページ	36-39
発行年	2008-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00002456/

Title	総合研究所 20 周年を迎えて 1：ヴェーバー、トレルチ、ニーバーそしてピューリタニズム（総合研究所 News）
Author(s)	聖学院大学総合研究所
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.18-No.2, 2008.9 : 36-39
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4771
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

総合研究所 20 周年を迎えて 1

——ヴェーバー、トレルチ、ニーバー
そしてピューリタニズム

総合研究所は 2008 年に設置 20 周年を迎えた。
ここでは研究活動を振り返って、総合研究所が目
指してきたことを確認したい。

総合研究活動の中でも重要な柱は 3 本である。
第一の柱は、講演会・シンポジウムを開催し、現
代の最先端の課題を明らかにすることである。第

二は、現代の課題に応える研究、また大学の教育の特徴を現す研究を進めることで、研究のスタイルとしては「共同研究」が取られた。第三は、研究の成果を学外に広げるために「大学出版会」、講座など「補助活動事業」を展開することであった。

I 講演会・シンポジウムの開催

1988年8月に開催された第一回の講演会では、後に聖学院大学大学院教授に就任されるロングアイランド大学、渡邊守道教授が「教皇権と公会議至上主義」を主題に講演された。主題を文字通り考えれば中世のカトリック教会内部の思想的葛藤に思われるが、渡邊教授はここに「立憲主義と議会主義」の政治思想的な萌芽があるということを指摘されている（『聖学院大学総合研究所紀要』第一号所収）。

以降、2008年3月までにじつに100回に及ぶシンポジウム、講演会を開催してきた。いくつかの主要な主題を挙げると、総合研究所の研究の目指すところ、またその特徴が浮かび上がってくる。

1) マックス・ヴェーバー、エルンスト・トレルチ、ゲオルク・イエリネックの思想研究

総合研究所では初期からトレルチ、マックス・ヴェーバーに関する講演会、シンポジウムを開催してきた。近藤勝彦「エルンスト・トレルチの今日的意味」（1990年）、ヨハネス・ヴァイス「宗教史から宗教社会学へ——エルンスト・トレルチとマックス・ヴェーバー」などである。1992年には著名なヴェーバー学者であった故フリードリヒ・テンブルック教授（チュービンゲン大学）ほかを招いて国際シンポジウム「マックス・ヴェーバーとエルンスト・トレルチの宗教社会学をめぐって」を開催している。

その後、ボストン大学のスティーヴン・コールバーグ、ハイデルベルク大学のコンスタンス・ザイファート、カッセル大学のヨハネス・ヴァイ

ス、ヴェルツブルク大学のヴォルフガング・リップ、デュッセルドルフ大学のヴォルフガング・シュベントカー（現在、大阪大学）など、著名なヴェーバー学者による講演を開催してきた。

2000年5月に開催した国際シンポジウム「ハイデルベルクにおけるアングロサクソン研究の伝統——トレルチ・ヴェーバー・イエリネック」はミュンヘン大学のフリードリヒ・W・グラーフ教授を招いてのシンポジウムである。この記録は『ヴェーバー・トレルチ・イエリネック』という主題で聖学院大学出版会から刊行されている。また、2007年にはグラーフ教授を中心に国際シンポジウム「マックス・ヴェーバーをどう読むか——神学と社会科学との間で」を開催した。

その他、2000年の国際シンポジウム「市民とは何か——現代市民社会論の現状と課題」（マックス・スタックハウス、スティーヴン・コールバーグ、古矢旬）、2001年の国際シンポジウム「大塚久雄における歴史と現代——没後5年を記念して」（関口尚志、柳父園近、ヴォルフガング・シュベントカーなど）でもヴェーバー思想が参照され、言及されている。これまで、ヴェーバーの名称のついた共同研究のプロジェクトはないが、ヴェーバーのエートス論、トレルチの文化総合論、イエリネックの人権思想は総合研究所の研究活動に通奏低音として響いている。

2) ラインホルド・ニーバーの思想

総合研究所の研究のもうひとつの特徴は、アメリカの政策に大きな影響を与えてきたラインホルド・ニーバーの思想に取り組んできたことである。1992年には、「生誕100年」を記念した講演会、シンポジウムを開催した。「聖学院大学総合研究所紀要」4号にこの記録が収録されている。

1999年にはエモリー大学の名誉教授、セオドア・R・ウェーバー氏を招いて「ニーバー以降のアメリカ社会倫理をめぐって」という主題で講演をお願いした。

2008年には20周年を記念したシンポジウム

「アメリカとニーバー」を開催した（高橋義文、西谷幸介、藤原淳賀）。出版会ではニーバーの著作として『光の子と闇の子』（武田清子訳、1994年）、『アメリカ史のアイロニー』（大木・深井訳、2002年）を出版するほか、高橋義文『ラインホルド・ニーバーの歴史神学』（1993年）、チャールズ・ブラウン『ニーバーとその時代』（高橋義文訳、2004年）を出版している。

3) ピューリタニズム思想

第三の特徴が、ピューリタニズム思想に着目してきたことである。

1999年にクロムウェル生誕400年を記念してシンポジウム「クロムウェルと現代——21世紀への視座」を開催した。その後、ピューリタニズムを主題にした講演会・シンポジウムは開催されないで今日まできたが、後で述べる共同研究プロジェクト「デモクラシーの研究」などの中で取り上げられてきた。そしてこの活動が共同研究「ピューリタニズム研究」にまた「日本ピューリタニズム学会」の設立へと展開してきたのである。

4) 現代の課題に取り組む

総合研究所の研究が目指すものとして、現代の世界、また日本の課題に取り組むということが特徴となる。

そのひとつが、「地方分権」の課題に取り組むべく地方自治に関する都市経営シンポジウムを1996年から毎年開催し、「都市政策に関する提言」を発表してきている。

また北朝鮮問題に見られるように東アジアの問題に取り組んでいることである。2002年に日韓現代史研究センターが設立されたが、国際シンポジウム「東アジアの平和と民主主義」を毎年開催している。

アジアだけにとどまらず国際関係に関する研究も進められている。2002年にハーバード大学の入江昭教授を招いてシンポジウム「戦後日米関係の回顧と将来の展望」を開催した。また2005年

には国際シンポジウム「戦後60年——ドイツと日本」を開催した。

医療と福祉に関する国際シンポジウムを開催した。2003年にLSE教授のハワード・グレナスター、ジュリアン・ルグラン、マーティン・ナッブを招いて「医療と福祉における市場の役割と限界——イギリスの経験と日本の課題」をいう主題で、イギリスにおける医療・福祉制度の改革から日本が何を学べるかを議論したのである。

100回を越えるシンポジウム・講演会のすべてではないが、ほとんどのシンポジウム記録は『総合研究所紀要』に収録され、あるいは研究報告書としてまとめられている。

II 共同研究の推進

研究所の第二の柱は、共同研究の推進である。「各教員、研究員のそれぞれの専門分野での研究活動を重んじながら、その成果を持ち寄り、総合的に研究する」ことを目指して、学内外の研究者による研究活動が進められている。

この研究活動も、大きく分けて3つの研究の特徴がある。第一は、大学、総合研究所のあり方に深く関わる「存立基盤に関わる研究」である。第二は現代の課題に直接的に、間接的に取り組み、研究成果を提言などで発表するものである。第三は、大学また法人の諸学校の教育に関わるもので、教育プログラムの作成、カリキュラムの作成などが研究成果となる研究活動である。

1) 大学の教育と研究の方向性を示し、大学の特徴を表現する研究

共同研究としてではじめて取り組んだ研究が「デモクラシーの研究」（1991年から1993年度、研究代表・故酒井文夫教授）である。

この研究では、近代デモクラシー思想の起源をイギリスのピューリタニズムに求め、その思想が、ヨーロッパ、アメリカ、アジアにおいてどのように展開し、法制度としてどのように具体化してきているかを比較研究するものであった。本研

究には日本私立学校振興財団の「学術研究振興資金」の助成があった。

この系列の研究は、その後「自由の伝統の再検討」(1994年から1996年)、「市民社会と国家の役割研究」(1997年から2002年)へと引き継がれ、現在は「グローバリゼーションの研究」(田中浩教授)に取り組んでいる。

また、本学の建学の精神であるキリスト教を現代においていかに弁証し、適用また応用するかの研究として「組織神学研究」がすすめられている。

2) 現代の課題に取り組む研究

研究所で学外の研究者、また自治体職員を研究メンバーとして共同研究に取り組んだのが「埼玉県の中核都市圏構想および都市政策に関する調査研究」(1996年から1998年、研究代表・佐々木信夫客員教授)である。現在「さいたま新都心」と名づけられているが、JRの操車場跡の開発、大宮市、浦和市、与野市の合併などの課題がそこにあり、大学としてどのように地域に関わるのかという問題があった。

東アジアの平和の問題にも1997年度から「朝鮮半島と北東アジア研究」(研究代表・鐸木昌之助教授)を開始した。このプロジェクトは日韓現代史研究センターの設立とともに「東アジアの平和と民主主義」(康仁徳客員教授・小田川興客員教授)の研究に発展している。

「社会保障研究」(郡司篤晃教授)、「人口減少期における自治体行政のあり方に関する調査・研究」(平修久教授)などが実施された。

現在においては、「カウンセリング研究」(平山正実教授)、「ヨーロッパ統合の理念と実態研究」(大木雅夫教授)、また「国際金融研究」(速水優全学教授・真野輝彦教授)などが進められている。

3) 大学の教育に関わる研究

大学の教育内容を改善し、よりよい教育プログ

ラムを作成することも総合研究所の設立当初からの研究課題である。

「語学教育研究」は、1993年度に開始され、現在においても研究活動は継続している。この研究会では『聖学院英語教育年報』をこれまでに5号発行して研究成果の公開を行っている。

その他「算数・数学一貫教育の研究」「学期制の研究」などが実施されてきた。現在も「グローバリゼーションの文脈における総合的日本研究」(鶴沼裕子教授)、「児童における総合人間学の試み」(村山順吉教授)、「福祉のこころ研究」(中村磐男教授)が、学部教育の充実と深化をめざして研究がすすめられている。

このような多様な主題による共同研究の実施が大学・大学院・諸学校の教育にさまざまな影響を与えているといえるであろう。(続く)